

平成22年6月15日現在

研究種目：若手研究（B）  
 研究期間：2007～2009  
 課題番号：19720227  
 研究課題名（和文） 近世以降の日本列島周辺の海域と内水面における漁撈活動からみた環境利用史  
 研究課題名（英文） Influences of Fishing on the Environment since the Tokugawa Era in and around the Japanese Archipelago  
 研究代表者  
 橋村 修 (HASHIMURA OSAMU)  
 国立民族学博物館・外来研究員  
 研究者番号：00414037

研究成果の概要（和文）：本研究は、近世近代以降の日本列島周辺の漁撈技術、漁場利用形態からみた海面・内水面の環境利用史を解明することを目的としている。調査研究の対象は、山陰、九州から南西諸島の17世紀から現代における、内水面のシバヅケ漁、海面のシイラ漬、定置網等の集魚装置漁業(FAD(fish aggregative device))、沖合漁業である。資料は近世史料に加えて、明治期漁業資料(『水産調査予察報告』など)を用い、現況の現地調査データとの対比、関連付けを試みた。

研究成果の概要（英文）：This theme is influences of Fishing on the Environment since the Tokugawa Era in and around the Japanese Archipelago. Special theme is institute of human and nature. Research region is Sanin, Kyushu and Okinawa, Amami island in 17thC-21thc. the target fishery are FAD(fish aggregative device)etc in sea and river.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	700,000	0	700,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	330,000	2,130,000

研究分野：歴史地理学

科研費の分科・細目：人文地理学・人文地理学

キーワード：(1) 環境史、(2)水産資源、(3)海面、(4)内水面、(5)回遊魚

## 1. 研究開始当初の背景

海域や内水面の環境利用史研究成果は、陸域の土地利用研究と比べて非常に少ない現状にある。いわゆる1990年代の網野善彦氏による海民史研究の必要性の提示と並行して、近世漁業史研究は若手研究者によって盛

んに進められ、漁場請負という論点も提示された。しかし、社会、経済の枠組のなかでの研究が主流を占め、人と自然との関わりを追究する視座は十分とは言えなかった。ところで、人と自然との関係の史的展開を追究する分野として歴史地理学がある。しかし、その

分野における研究は、土地利用の歴史が中心で、海面、内水面の占有や利用形態を解明した研究は、1950年代の河野通博氏などに限られている。筆者は、これまで、歴史地理学の立場から、人と海との関わりについて、テリトリーや「なわばり」、コモンズの議論を取り入れながら、研究を進めていた。こうした研究を科学研究費補助金で取り組むことができないかというのが、研究開始の理由のひとつである。

もうひとつの理由を述べておきたい。これまでの当該研究は、基礎資料の集積も十分とはいえなかった。本研究を申請した2006年当時は、市町村合併に加えて、漁業協同組合の合併の動きが進み、関連する水産資料・史料の散逸、廃棄が心配されていた。筆者は、熊本県宇土市史編纂事業に携わる過程で、有明海に面する宇土市住吉漁協で大量の漁協資料を発見し、こうした資料の保存と管理、そして活用が緊急の問題であると痛感した。こうした問題の解決策を見出せないか、それも申請した理由である。

## 2. 研究の目的

本研究は、近世近代以降の日本列島周辺の漁撈技術、漁場利用形態からみた海面・内水面の環境利用史を解明することを目的としている。

地表面の景観の学と見なされてきた地理学の中で、漁業の歴史地理研究は、従来の地理学にない景観復原方法を提示する役割を持つ。それは、漁撈民俗、漁業史研究、民俗魚類学、民俗植物学を融合させることで、可能になる。こうした研究の方向性を、「漁撈生態史」として位置づけていく。

本研究では、近世から現代までの漁撈活動、漁法、漁業技術を、明治期の水産博覧会資料、水産調査資料をベースに民俗資料も用いつつ検討する。

分析対象は、内水面のシバヅケ漁、海面のシイラ漬、定置網等の集魚装置漁業（FAD (fish aggregative device)）、沖合漁業、海と陸の接点に位置する魚付林となる。明治期漁業資料を分析するメリットとしては、明治40年前後の漁船動力化以前の様子を記しているため近世漁業とのつながりを見出しやすい点、民俗学の聞き取りで得られた事例との結合が容易なこと、現代の東南アジアの伝統漁撈の事例と日本近代の漁撈に類似点を見出せる可能性等が挙げられる。

本研究では、明治期史料や近世近代漁業絵図に比重をおきつつ、海域や内水面の環境利用の歴史、換言すれば、魚と人との関わり方の歴史の解明を目指している。

それを踏まえ、本研究では、近世近代以降の日本列島周辺の漁撈技術、漁場利用形態からみた海面・内水面の環境利用史を解明する

ことを目的に進められた。

## 3. 研究の方法

### (1) 史料、資料の調査研究

まず、水産史の作業を進めるための資料収集をおこなった。これは、明治10年代から20年代に出された各県の水産誌、明治16年の水産博覧会に出品された各県の資料、漁場争論絵図、各地の自治体誌に収録された民俗誌、漁業史料、古地図の調査である。資料調査地は、東京海洋大学図書館、長崎県立長崎図書館、長崎歴史博物館、長崎大学水産学部資料室、熊本県立図書館、熊本大学附属図書館、鳥取県立図書館(文書館)、香川県立図書館、沖縄県立図書館、長崎県水産試験場、九州大学附属図書館、久留米市立図書館、鹿児島県歴史資料センター黎明館、奄美市立博物館などである。

### (2) 漁撈と魚食文化の調査研究

次に、古くから続く漁業と魚食文化の現地調査をおこなった。調査地は、沖縄県沖縄本島(シイラ漁、ソデイカ漁、モズク漁、パヤオ漁場での一本釣漁など)、与那国島(カジキ釣)、熊本県有明海(イカカゴ漁とツボ網、干潟の集魚装置漁業)、長崎県五島列島(まき網と定置網、イルカ追い込み網)、長崎県島原半島と生月島(定置網、干潟の集魚装置漁業)、鳥取県(シイラ漬漁場と山間部のシイラ食文化)、広島県北広島(山間部のサメとシイラの食文化)、鹿児島県奄美大島(サワラ突き漁、シイラ漁とシイラの食文化)でおこなった。これまで収集してきた近世近代の漁業絵図のデータ整理を進めた。

## 4. 研究成果

研究の結果を年度ごとにみていこう。

3年間の研究の間に痛感したことは、高齢化した伝承者からの聞き取りと、失われつつある史料の発掘と保存が急務となっているという点である。

### (1) 2007年度

本年度の研究は、近世近代以降の日本列島周辺の漁撈技術、漁場利用形態からみた海面・内水面の環境利用史を解明することを目的としている。分析対象は、内水面のシバヅケ漁、海面のシイラ漬、定置網等の集魚装置漁業（FAD (fish aggregative device)）、沖合漁業、海と陸の接点に位置する魚付林となる。

当該年度は、明治期漁業資料(『水産調査予察報告』、『水産調査特別事項』、『漁業ト森林トノ関係』、『日本水産捕採誌』など)を用いたデータベース作りを進めた。その作業を進めるための資料収集(明治10年代から20年代に出された各県の水産誌、明治16年の水産博覧会に出品された各県の資料、各地の

民俗誌)調査を、東京海洋大学図書館、長崎県立長崎図書館、長崎歴史博物館、熊本県立図書館、熊本大学附属図書館、鳥取県立図書館(文書館)、香川県立図書館、沖縄県立図書館、長崎県水産試験場、九州大学附属図書館でおこなった。

また、古くからおこなわれている漁業の現地調査を、沖縄県沖縄本島、与那国島、熊本県有明海(イカカゴ漁とツボ網、干潟の集魚装置漁業)、長崎県(定置網、干潟の集魚装置漁業)、鳥取県、鹿児島県(突き棒漁)でおこなった。これまで収集してきた近世近代の漁業絵図のデータ整理を進めた。

その結果、長崎県立長崎図書館蔵の明治期長崎県水産課簿冊の中に、明治期の有明海沿岸域各郡の郡漁業組合規約を発見した。この史料は、これまで未発見だった史料で、明治期の有明海の海洋資源の利用の取り決めや漁期を解明できる一級史料である。各地で発見した資料群を整理、分析することで、過去の人々の環境利用のあり方を抽出でき、現在の環境問題へ提言が可能になる。

### (2) 2008 年度

前年度に引き続き、近世近代漁業資料、水産絵図のデータ収集と現地での漁撈活動に関わる聞き取り調査と考察をおこなった。

漁業資料、水産絵図は、長崎歴史博物館、熊本大学附属図書館、鹿児島県立図書館、鹿児島市立図書館、久留米市立図書館、小値賀町歴史民俗資料館、新上五島町鯨賓館、天草市教育委員会等で調査を実施した。

各地に残る伝統的な漁撈調査は、有明海(熊本県、長崎県、佐賀県)、南九州において集中調査をおこない、近世近代水産史料との比較をおこなった。

4月～5月は、前年度に集積した水産資料と水産絵図に関する読解と分析を進めた。また、有明海漁業史に関わる原稿を作成し、宇土市史編纂委員会の査読を経て『新宇土市史通史編第3巻』などに掲載された。

6月～10月は、これまでの研究成果をまとめる作業をおこない、2009年2月に単著『漁場利用の社会史』を刊行した。

10月から3月にかけては、有明海の漁業史料調査と漁撈習俗調査を福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県でおこなった。また、南九州の漁撈資料と漁撈民俗調査を鹿児島県で実施した。

2月～3月は、成果のまとめをおこない、学会誌への投稿準備を進めた。

一連の調査の結果、新上五島町鯨賓館において、当館に寄託されている奈良尾地区の東掛文書のなかに寛政期のカツオ、マグロ漁業水揚帳を、有川漁協からの当館寄託史料のなかに「イルカ勘定帳」などがあることを確認した。

また、天草市の上田家文書の漁業史料に天草と長崎との関わりを示す内容を確認した。引き続き、史料発掘と聞き取りを行うとともに、収集史料の分析を進め、過去の人々の環境利用のあり方を抽出し、現在の環境問題への提言をおこなうことが課題となる。

### (3) 2009 年度

前年度まで取り組んできた近世近代漁業資料、水産絵図のデータ収集と現地での漁撈活動に関わる聞き取り、データ収集の補助的な調査をおこない、分析と考察をおこなった。

さらに、研究の最終年度であることから、これまでの解明事項を、日本地理学会、日本民俗学会、長崎県平戸市での招待講演で口頭報告した。さらに、『南方文化』誌などの学会誌等への投稿を進めた。

調査は、鹿児島県歴史資料センター黎明館と鹿児島県内の漁協、奄美市立博物館と奄美大島の漁村、沖縄県国頭村漁協と沖縄本島の漁村などで実施した。

調査は①近世近代水産史料調査、②回游魚シイラの漁撈利用調査に区分される。

①については、奄美市立博物館において、当館に寄託されている童虎山房文庫(故・原口雄雄鹿児島大学名誉教授の蔵書)の調査をおこない、これまで学界で知られていなかった大変貴重な近世薩摩藩領内の水産史料の筆写本を閲覧、撮影し、本史料群の水産関係分の簡易目録を作成した。史料の内容分析と、さらなる調査は、今後、継続する予定である。

②については、奄美大島と沖縄本島国頭村のシイラ利用と漁撈の調査を進め、ある一定の見通しを得ることができた。この内容を中心にして、秋季の学会で報告をおこなった。

また、長崎県平戸市生月島の館浦漁協で開催されたシイラフォーラムにおいては、主催者側(館浦漁協、平戸市)から招待を受けて講演をおこなった。講演では、現在、雑魚として扱われがちであるところのシイラをめぐる、古くからの文化と現在の世界各地における商業的な価値について紹介し、シイラへの理解を求めた。

これらのフォーラムや琉球大での日本地理学会に参加することで、次の点を気付かされた。すなわち、シイラのような魚の歴史や文化を取り上げることは、ロット生産に乗らないような少量漁獲の魚が、地域社会のなかでいかに消費されているか、「地魚」の価値の再考につながるという点である。このことは、日本のマグロにあるような、画一的な魚食文化の全国普及を再考し、旬に応じて捕れる「地魚」に注目して、限られた水産資源をバランスよく漁獲し、消費する動きにもつながる。これらの点は、本研究の成果が、社会に貢献する可能性のあることを意味しているといえよう。

最後に、本研究が、開始した当初の当該領域の研究状況を、この3年間でどのような進展させたのか、述べておきたい。

まず、陸域の土地所有と比べて海域や内水面の占有・利用の歴史の研究が少ないという点に関しては、本研究でのフィールドワークと史料調査の成果の刊行、および筆者が、1996年以降継続している研究成果を、2009年2月に『漁場利用の社会史』(人文書院)としてまとめたことで、この3年の間で進展をみたといえる。『漁場利用の社会史』に対しては、古地図や漁場争論史料などのような絵画史料を漁場利用研究に初めて用いた成果で、漁場利用の史的展開が非常にクリアになったとして、漁業経済学会より、2010年学会賞が授与された。

また、漁業関係史料の保存と活用については、各地の漁協や関係機関、個人の御宅を訪問し、史料を新たに発見し、その史料の意義を関係者に説明することに努めてきた。そうしたなかで、関係者の間で保存に向けた動きなどが始めている。今後とも、全国各地の漁協などを回って、所蔵資料・史料の保存と活用について訴えていきたい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計16件)

- ①橋村修「回遊魚の利用をめぐる環境史—対馬暖流域において—」池谷和信編『日本列島の野生生物と人』世界思想社、2010年、190—214頁、査読無。
- ② Hashimura Osamu ”Paddy Fishing” Akimichi Tomoya(ed) “An Illustrated Eco-history of the Mekong River Basin” White Lotus, 2009, 41—42頁、査読無。
- ③ Hashimura Osamu “Fish Traps” Akimichi Tomoya(ed) “An Illustrated Eco-history of the Mekong River Basin” 2009年、71—73頁、査読無。
- ④橋村修「近代編 変革の中の宇土 漁村と漁業環境の変化」宇土市史編纂委員会編『新宇土市史 通史編 第3巻 近代・現代・年表』宇土市、査読有 通史編第3巻、2009年、97—103頁。
- ⑤橋村修「近代編 日清・日露戦争期の宇土漁業法の制定と漁業組合」宇土市史編纂委員会編『新宇土市史 通史編 第3巻 近代・現代・年表』宇土市、査読有、通史編第3巻、2009年、324—336頁。
- ⑥橋村修「近代編 大恐慌から十五年戦争へ漁業」宇土市史編纂委員会編『新宇土市史 通史編 第3巻 近代・現代・年表』宇土市、査読有、通史編第3巻、2009年、521—532頁。
- ⑦橋村修「現代編 焦土からの出発 ノリ養殖業の展開」宇土市史編纂委員会編『新宇土市史 通史編 第3巻 近代・現代・年表』宇土市、査読有、通史編第3巻、2009年、637—645頁。
- ⑧橋村修「現代編 宇土市の成立と高度経済成長 一九六〇年代以降の漁業」宇土市史編纂委員会編『新宇土市史 通史編 第3巻 近代・現代・年表』宇土市、査読有、通史編第3巻、2009年、688—694頁。
- ⑨橋村修「南西諸島における回遊魚の民俗」『南方文化』36、査読有、2009年、127—143頁。
- ⑩橋村修「書評 福島県立博物館 鹿児島県歴史資料センター黎明館共同企画『樹と竹—列島の文化、北から南から』」『民俗文化』(近畿大学民俗学研究所) 21、査読無、2009年、311—320頁。
- ⑪橋村修「回遊魚シイラにみるハワイにおける魚食文化と観光」岸上啓伸編著『海洋資源の流通と管理の人類学 (みんぱく実践人類学シリーズ)』明石書店、査読無、第3巻、2008年、221—243頁。
- ⑫橋村修「メコンの柴漬漁」秋道智彌・黒倉寿 編『人と魚の自然誌』世界思想社、2008年、69—86頁、査読無。
- ⑬秋道智彌、池口明子、後藤明、橋村修「メコン河集水域の漁撈と季節変動」河野泰之責任編集『生業の生態史』、弘文堂、2008年、69—86頁、査読無。
- ⑭橋村修「ハワイの魚食文化の展開と日系漁業関係者の動き」『立命館言語文化研究』93、2008年、201—214頁。査読有。
- ⑮橋村修「五島列島における他国漁業者の定着と漁業権獲得」平岡昭利 編『離島研究』III、海青社、2007年、24—35頁、査読無。
- ⑯橋村修：「漁獲物分配慣行「カンダラ」の変化—コミュニティベース「里海」漁業の変化のなかで」『龍谷大学里山ORC研究成果報告書』2007年度報告、410—424頁、2007年、査読無。

[学会発表] (計6件)

- ①橋村修「日本と世界のシイラの食文化(招待講演)」『シイラフォーラム』主催：館浦漁業協同組合、2009年11月7日、長崎県平戸市・生月船員福祉会館。
- ②橋村修「沖縄における回游魚シイラと人の関わり」日本地理学会秋季大会、2009年10月25日、沖縄県・琉球大学。
- ③橋村修「『聖なる魚』から『雑魚』へシイラの民俗ー」日本民俗学会 第61回年会、2009年10月4日、東京都・國學院大學。
- ④橋村修「近世の天草諸島における漁業権と漁場利用」日本地理学会 秋季学術大会。(2007年10月7日)。熊本県・熊本大学。
- ⑤橋村修「ハワイ日系漁業移民の定着とその後の変化」立命館大学国際言語文化研究所シンポジウム太平洋における日本人移民の体験 3。(2007年7月13日)。京都府・立命館大学衣笠キャンパス末川記念会館。
- ⑥橋村修「回游魚シイラの流通と文化-環太平洋(アジア、ハワイ、コスタリカ)において」"生き物文化誌学会 第5回学術大会。(2007年6月23日)。神奈川県・神奈川県立かながわ女性センター。

[図書] (計1件)

- ①橋村修『漁場利用の社会史』人文書院、2009年、272頁。(漁業経済学会・2010年学会賞受賞)

[その他]

○ホームページ

国立民族学博物館ホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/research/sr/19720227.html>

○新聞掲載情報

「現代かわら版まぐる7つの「へえー」縄文遺跡から骨 江戸以降ひろまる」・北海道新聞社(朝刊)・2010年3月19日。

6. 研究組織

(1)研究代表者

橋村 修 (HASHIMURA OSAMU)  
国立民族学博物館・外来研究員  
研究者番号：00414037

(2)研究分担者

無し

(3)連携研究者

無し